

ラオデキア - ナンバー・ファイブ

最後の三つ

Jeff Pippenger

2023-09-03

理想的には、七つの教会と七つの封印は、同じ歴史の内的な筋道と外的な筋道を表す並行する象徴として理解されるべきである。さらに、最後の三つの教会と最後の三つの封印を考察する際には、漸進する歴史を示す筋道は、それらの象徴の主要な主題ではないことにも留意することが重要である。教会を並行する歴史の文脈で適用する場合には、歴史の進行は象徴性の本質的な要素となるが、最後の三つの教会と封印をそれ自体をひとまとまりの象徴として扱う場合には、そうではない。

象徴としての最後の三つの教会は、三つのグループの関係と、さまざまな教会によって表される礼拝者の三つのグループの相互作用のあり方に関するものである。最後の三つの封印は、モーセとエリヤによって表される神の民を示している。エリヤは十四万四千人を、モーセは義なる死者たちを表している。

そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は祭壇の下に、神の言葉のゆえに、また彼らの持っていた証しのゆえに殺された者たちの魂を見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なるまことの主よ、いつまでお待ちになるのですか。地に住む者たちを裁き、私たちの血の復讐をしてくださらないのは。」そして彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ、彼らの仲間のしもべたちや兄弟たちで、彼らと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで、なおしばらくの間休むようにと言いつ渡された。彼が第六の封印を開いたとき、大地震が起こった。太陽は毛の粗布のように黒くなり、月は血のようになった。天の星は地に落ちた。ちょうど、強い風に揺さぶられたいちじくの木が未熟な実を振り落とすように、天は巻物が巻き合わせられるように消え去り、すべての山と島はその場所から動かされた。地の王たち、高官たち、富める者たち、將軍たち、力ある者たち、すべての奴隷もすべての自由人も、洞窟や山の岩間に身を隠し、山と岩に向かって言った。「私たちの上に倒れ、御座に座しておられる方の御顔と、小羊の御怒りから私たちを隠してくれ。御怒りの大いなる日が来たからだ。誰が立つことができようか。」 黙示録 6:9-17

ホワイト姉妹は、第五の封印が「将来のある期間」を扱っていると教えています。第五の封印の聖句は、暗黒時代に神の民を殺害したことについて、神がいつ教皇制を裁かれるのかを問うています。その答えは、「終わりの時」に、神がその殺害のゆえに教皇制を裁かれるだけでなく、日曜法の危機の間に教皇制によって殺されることになる、教皇制による殉教者のもう一つの群れについても裁かれるというものでした。

「そして、彼が第五の封印を開いたとき……（黙示録6章9-11節）。ここでヨハネに示された光景は、現実のものではなく、将来のある時期に起こる出来事であった。」 Manuscript Releases 第20巻、197頁。

靈感はまた、神が教皇制をいつ裁くのかを知りたいと願っている祭壇の下の魂たちが、黙示録18章でその栄光をもって地を照らす天使の二つの声と結びついていることを確認

している。

「第五の封印が開かれたとき、啓示者ヨハネは幻の中で祭壇の下に、神の言葉とイエス・キリストの証のゆえに殺された者たちがいるのを見た。この後、忠実で真実な者たちがバビロンから出てくるようにと呼びかけられる黙示録第18章に記された情景が続いた。黙示録18章1-5節引用。」 Manuscript Releases, 第20巻、14.

黙示録18章では、カトリック教に対する裁きは二重であり、そこで彼女は、「終わりの日々」に彼女が殺害することになる人々のためだけでなく、教皇支配の暗黒時代に殺害された人々のためにも罰せられる。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」
ヨハネの黙示録 18:4-6

第六の封印は、七つの最後の災いの期間におけるキリストの再臨直前の出来事を、聖書の古典的な描写の一つとして示している。それは、第六の封印の最後の節で提起される「だれが立つことができようか」という問いに答えを与える、黙示録第7章への導入で締めくくられる。七つの最後の災いが到来すると終結する日曜令の危機において、神の旗印として立つ二つの集団がいる。その二つの集団とは、エリヤに象徴される十四万四千人と、モーセに象徴される「大群衆」である。この二つの象徴であるモーセとエリヤは、世の終わりに立つ者たちとして示されてきた。なぜなら、彼らはともに変貌の山でキリストと共に立ったからである。

暗黒時代における教皇制の殉教者たちの第一の群れは白い衣を与えられ、彼らに「その数が満ちるまで待つように」と告げられた第二の群れは、同じく白い衣をまとった「大群衆」である。第五と第六の封印は第五と第六の教会の並行史を示しているのではなく、「終わりの日」に主の旗印として立ち上がる二つの群れについて証言している。その二つの群れとは、黙示録十八章における二つの声のメッセージを宣べ伝える者たちである。そのとき宣べ伝えられるメッセージは、ペンテコステの歴史とアドベンチズムの初期における「真夜中の叫び」の歴史に象徴されているように、聖霊の注ぎを伴う。

第三天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を照らすであろう。ここには、世界的規模でこれまでにない力をもつ働きが予告されている。1840年から44年の再臨運動は、神の力の栄光に満ちた現れであった。第一天使のメッセージは世界のあらゆる宣教地にまで運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来いづれの地でも目撃されたことのないほどの宗教的関心が起こった。しかし、これらは、第三天使の最後の警告のもとで起こる力強い運動によって、なおいっそう凌駕されるだろう。

その働きはペンテコステの日の出来事と同様になるだろう。福音の始まりに、聖霊の注ぎによって尊い種が芽生えるために「初めの雨」が与えられたように、その終わりには収穫を成熟させるために「後の雨」が与えられる。「そうすれば、私たちは主を知ることを求め続けて、主を知るようになる。主の現れは暁のように確かで、主は雨

のように、地に降る後の雨と初めの雨のように、私たちのところに来られる。」ホセア書 6:3。「シオンの子らよ、喜び楽しめ、あなたがたの神、主にあつて。主はあなたがたに初めの雨をほどよく与え、あなたがたのために、雨、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。」ヨエル書 2:23。「終わりの日に、と神は言われる、わたしの霊をすべての人に注ぐ。」、「そして、主の名を呼ぶ者はだれでも救われる。」使徒行伝 2:17、21。

福音の偉大な働きは、その始まりを特徴づけた神の力の顕現よりも小さな顕現をもって閉じられることはない。福音の開幕における「前の雨」の注ぎの際に成就した預言は、その終わりにおける「後の雨」において再び成就する。ここに、使徒ペテロが次のように言って待ち望んだ「さわやぎの時」がある。「それゆえ、悔い改めて立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られる。主の御前から『さわやぎの時』が来るとき、主はイエスを遣わしてくださる。」使徒行伝3章19、20節。『各時代の争闘』611ページ。

第六の封印が、黙示録第七章に描かれているエリヤとモーセを導入する問いを提起した後、第七の封印が開かれ、その二つのグループの上に聖霊が注がれることが記される。注目すべきは、その記述の中に半時間の沈黙があることである。第七の封印の開封とともに示される後の雨の聖霊の注ぎには、沈黙の期間が含まれている。

そして彼が第七の封印を開いたとき、天ではおよそ半時間の静けさがあつた。私は神の御前に立っている七人の天使を見た。彼らには七つのラッパが与えられた。さらに別の天使が金の香炉を持って祭壇の前に立った。彼には多くの香が与えられ、御座の前にある金の祭壇の上で、すべての聖徒の祈りに添えてそれをささげるためであつた。聖徒たちの祈りとともに立ち上る香の煙は、天使の手から神の御前へと上っていった。そして天使は香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけた。すると、声と雷鳴と稲妻と地震が起こつた。ヨハネの黙示録 8:1-5。

先ほど『The Great Controversy』の一節で述べたように、力ある天使が降り、その栄光で地を照らすとき、後の雨は注がれ始める。後の雨は、2001年9月11日に「ニューヨーク市の大きな建物が打ち倒された」ときに始まつた。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされるとき、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」Review and Herald、1906年7月5日。

2001年9月11日、後の雨が降り始め、その雨の注ぎ出しはエリヤとモーセに象徴される者たちの上に降り注ぎ、また沈黙の時を含んでいる。モーセとエリヤに関する沈黙の時は、黙示録第11章にも表されており、そこでは、世を苦しめたあの二人の預言者であるモーセとエリヤが通りで「殺された」と記されている。しかし三日半の後、彼らはホレブ山の洞穴から出て天に昇った。後の雨の歴史において、その二人の使者によって表されるメッセージは殺され、通りに投げ出されるが、彼らが復活するまで葬られることはない。これは、今やユダ族の獅子が封印を解いておられる主要な真理の一つである。

最後の三つの封印は、エリヤとモーセによって表される神の民の最後の運動を指し示している。その運動は死に、復活する。それは運動である。というのも、アドベンティズムは、ウィリアム・ミラーが導かれて認められた最初の真理を彼らが脇に置いた1863年まで続いた一つの運動として始まったからである。1863年にその運動は終わった。というのも、1863年に彼らは法的に教会となったからである。アルファでありオメガである方は、もしご自身が残りの民を運動として始められたのなら、また運動としてそれを終わらせると断言しておられる。

私たちは今や、七つの教会と七つの封印の概観を終えました。最後の三つの封印において、贖われた者の二つの区分がモーセとエリヤによって表されているのを見ます。これらの封印は皆、黙示録18章の力ある御使いを証ししています。彼が2001年9月11日に下って来たとき、二つの区分の贖われた者が浄化の過程に入りました。それは、アドベンティズムの初めの運動によって予表されたように、アドベンティズムの終わりにおける運動の内部にいる礼拝者を暴露し、分離することを目的としたものです。ダニエルは、一方の区分、すなわち彼が悪しき者と呼ぶ者たちは知識の増加を理解しないが、賢い者は理解する、と示しています。マタイは、封印が解かれて明らかになった知識を理解しない者は愚かなおとめとして識別されることを教えています。賢いおとめたちは、真夜中の危機において、彼女たちがその増し加わった知識を理解し、持っていることを示します。賢い者と愚かな者は、それぞれフィラデルフィアの教会とラオデキアの教会によって表されています。ラオデキアの愚かなおとめである悪しき者たちは主の御口から吐き出され、賢い者たちはその額に神の御名、すなわちその御品性を受けます。もし第六の教会であるフィラデルフィアが賢い者たちを表すのなら、どうして第七の教会であるラオデキアが悪しき者たちを表すのでしょうか。もしそうだとすれば、順序が狂っているではありませんか。もちろん答えは、アルファとオメガによって説明がつきます。

神の名を帯びる最初の民である古代イスラエルの始まりにおいて、モーセは、その民の終わりにおけるキリストを予表した。

モーセは確かに父祖たちに言った。「あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者を、あなたがたのために起こされる。彼があなたがたに語るすべてのことについて、彼に聞き従いなさい。そして、その預言者に聞き従わないすべての者は、民の中から断たれる。」使徒の働き3:22-23

最初の神に名づけられた民の終わりに、バプテスマのヨハネは、キリストの初臨のために道を備えたエリヤの使者であった。続いてイエスは十字架で御自身をささげ、そののち天の聖所の聖所で大祭司としての務めを始められた。第二の神に名づけられた民、すなわ

ち現代のイスラエルの始まりに、ウィリアム・ミラーはキリストの再臨のために道を備えるエリヤの使者であった。そのときイエスは突然、至聖所に入れられ、裁きを開始された。第二の神に名づけられた民の終わりに、最後のエリヤの使者が、キリストが生ける者の審判の経緯を開始し、天の大祭司としての働きを完結し、そして再臨されるために道を備えた。

ウィリアム・ミラーは、使者だけでなく、彼が関わっていた運動も象徴している。

震えながら、ウィリアム・ミラーは人々に神の国の奥義を解き明かし始め、預言の言葉をたどりながら、聞く者をキリストの再臨へと導いた。働きを重ねるごとに、彼は力を増していった。バプテスマのヨハネがイエスの初臨を告げ、その来臨の備えをしたように、ウィリアム・ミラーも彼に加わった者たちとともに、神の子の再臨を宣べ伝えた……。

何千人もの人々が、ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように導かれ、神のしもべたちが、エリヤの霊と力をもってそのメッセージを宣べ伝えるために立てられた。『初期の著作』229、230、233。

古代イスラエルの初めに、神はモーセを召された。彼はエジプトで四十年にわたる墮落した教育を受け、その影響を彼の性格から取り除くために四十年の荒野生活を必要とするほどであった。生まれて四十年が過ぎ、神の民をエジプトから導き出すために自分が選ばれていると理解したモーセは、人間的な力に頼んでエジプト人を殺してしまった。さらに四十年後、燃える柴のところで彼は神の召しに逆らった。ついにその召しを受け入れた後でさえ、死の脅威にさらされるまで、彼は自分の子を割礼せよとの命令をないがしろにした。約束の地の境で、彼は反逆して岩を二度目に打った。古代イスラエルの始まりにおいて、モーセはラオデキア的な性質を帯びていた。それにもかかわらず、古代イスラエルの終わりにおけるキリストの型をも含め、その高く聖なる召しをなおも果たした。つまらぬ論争を仕掛けるユダヤ人、すなわち自分はユダヤ人だと言いながら実はそうでない者たちと格闘されたキリストは、フィラデルフィア的な性格を体現していた。古代イスラエルの始まりにおいて、モーセは金と目薬と白い衣を必要とするラオデキア的な者を表していた。終わりには、キリストはフィラデルフィア的である。

アドベンチズムの初めにおいて、衣を汚していないサルディスの少数の者に象徴されるウィリアム・ミラーは、彼に結びついた運動と同様に、フィラデルフィア人を表していた。アドベンチズムの終わりにおいては、1989年に終わりの時を認識した運動は、モーセがそうであったのと同程度にラオデキア的であった。ミラー派運動は、最初の運動はフィラデルフィアの時代にフィラデルフィア人によって成就し、最後の運動はラオデキアの時代にラオデキア人によって成就するという予言的な但し書きを伴って、Future for America の運動を型示している。

私は、1989年からのこの運動の予言的歴史について、フューチャー・フォー・アメリカの歴史に関わってきた誰よりも多くを目撃してきた証人であり、1989年に始まるその歴史を、認定されたラオデキヤ的アドベンチストとして自ら歩んできたことを証言する。その道のりには、私の証言を支持してくれる多くの魂がいる。また、アドベンチズムの終わりにおいてこの運動に関わった者たちもまた、認定されたラオデキヤ的アドベンチスト

であったことを、確信をもって証言できる。第一の名をもって呼ばれる民は、ラオデキヤとして始まり、フィラデルフィアとなって終わる。第二の名をもって呼ばれる民は、フィラデルフィアとして始まり、フィラデルフィアとなるように召されているラオデキヤとして終わる。これがアルファでありオメガである方の署名である。

指導者と彼に加わった者たちの惨めで哀れな霊的盲目にもかかわらず、神は1989年から現在に至るまでに起こった預言的な道標をなおも導き、統御しておられた。指導者と彼に加わった者たちの霊的な裸と貧しさにもかかわらず、神はなおも、御心にかなうと見なされた真理の封印を解くことを導いておられた。御自身の「真理」と決して切り離されないその憐れみにおいて、神は、ラオデキヤ人が死に、その後フィラデルフィア人として復活することを可能にする清めの過程を備えられた。その死と復活は、ダニエル書と黙示録の著者たちによって型として示されており、彼らは二人とも象徴的に殺され、復活させられた。ヨハネは、煮えたぎる油の釜に投げ込まれるという死からよみがえらされ、ダニエルは、飢えた獅子の穴に投げ込まれるという死からよみがえらされた。したがって、二つでありながら一つの書であるこれらの書は、今まさに解かれつつあるメッセージの一部として、死と復活という象徴に重点を置いている。

(ミラー派運動によって型示されていた) 調査審判の「終わりの日々」における運動が時の終わりに近づくとつれ、神は、その指導者と運動が殺され、その後によみがえらされるようお定めになっていた。七つの教会の文脈では、ラオデキヤは2020年7月18日に殺され、近づきつつある日曜法の前にフィラデルフィアとして復活することになっていた。よみがえったこの運動は七つの教会に属しながら、八番目である。すなわち、その運動は七つに属する八番目である。

この預言的な秘義は、これまで認識されてこなかったが、『黙示録』において複数の証しによって裏付けられている。いま私たちは、この時代に、獣の像の試練に入りつつある。これはホワイト夫人が、日曜法に先立って来る試練だと教えているものである。神の印がその時代におけるフィラデルフィアの人々に押されるのは、日曜法の時である。しかし彼らは、恵みの期間が閉じる前に来る獣の像の試練に合格しなければならない。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してください。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が神の印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗のもとに加わり、生ける神の印を受けるであろう。天からの真理を捨てて日曜安息日を受け入れる者は、獣の印を受けるであろう。『Manuscript Releases』第15巻、15。

現在の時代において、かつて共和主義とプロテスタント主義と見なされていた二つの角は、すでに民主主義と背教的プロテスタント主義へと変化している。その二つの角が完全に結合すると、それらは一つの権力、一つの角となる。同じ時期に、神は獣の像に対して

警告するために、プロテスタントの真の角を見いだして高く掲げる。その二つの角は、アメリカ合衆国が聖書預言における第六の王国でなくなるまで、互いに並行して進む。

黙示録17章は、竜（国際連合）、獣（教皇権）、偽預言者（アメリカ合衆国）の三者連合が、七つの頭から出た第八の頭に当たる勢力であることを明らかにしている。その七つの頭とは、聖書の予言における諸王国のことで、バビロンに始まり、メド・ペルシャ、ギリシャ、そして異教ローマへと続く。次いで第五の王国は教皇ローマであり、1798年に預言的に致命的な傷を受けた。その時点で、聖書の予言における第六の王国であるアメリカ合衆国が王座に就いたが、間もなく到来する日曜法によって打ち倒されるまでのことである。

国連は、全世界を従わせる権力によって、獣の像を立てるよう強いられることになる。その時点で第六の王国もまた致命的な傷を負っているが、アメリカ合衆国は国連に対する自国の指導権を受け入れるよう全世界に強いるだろう。さらに、三重の連合を統治するための教皇権の道徳的権威を受け入れることも要求するだろう。

そして彼は、獣の前で行うことを許されていた数々のしるしによって地に住む者たちを惑わし、地に住む者たちに、剣の傷を負ってなお生き延びた獣のために像を作るようにと言った。そして彼は、獣の像に命を与える力を持っていて、その獣の像が語り、また、獣の像を礼拝しようとしぬ者は皆、殺されるようにした。ヨハネの黙示録 13:13, 14.

「獣の像」に関する靈感による唯一の定義は、それが教会（教皇権）と国家（国際連合、アメリカ合衆国が他の九人の王を支配している）の結合を表しているということである。イゼベルは教皇権、アハブは北の十部族の王であるアメリカ合衆国である。

アメリカ合衆国が日曜法で倒れるとき、1798年以来忘れ去られていたツロ（ローマ教皇権）が「想起され」、誘惑の歌を歌い始める。エレン・ホワイトの著作で「国家的破滅」と表現されている金融崩壊により、アメリカ合衆国は、万人の手を彼に対して結集させる聖書的な力に対処するため、世界全体を結束させることを余儀なくされる。その力とはイスラム教であり、イスラム教の始祖イシュマエルによって象徴されている。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12.

アメリカ合衆国は、他の九人の王たちと同盟を結び、主導権を握る。この主導はごく短期間にとどまり、その後、教皇権がそのすべての上に立つよう強く主張するようになる。ちょうどイゼベルがアハブを支配したように。

したがって、竜、獣、偽預言者の三者連合は、連れ立ってハルマゲドンへと進軍する。数字の八は復活を表し、致命的な傷を負うと預言に記されている王国は第五の王国、すなわち教皇権である。教皇権が復活すると、第八の王国となり、この三者連合の支配権を与えられる。そしてその第八の王国は、致命的な傷を負うと特定されている七つの王国の一つの頭であるが、靈感はその致命的な傷の癒やしについても示している。

最後の危機に近づくにつれて、主の器たちの間に調和と一致が存在することは死活的に重要である。世界は嵐と戦争と不和で満ちている。しかし、一つの頭-すなわち教皇権-のもとで、人々は神の証人たちを通して現れる神に敵対するために一致するであろう。この結合は大いなる背教者によって固められる。彼は真理に対する戦いにおいて自分の手先たちを結束させようとする一方で、その擁護者たちを分裂させ、散らそうと働く。嫉妬、邪推、中傷は、彼によってそそのかされ、不和と分裂を生じさせる。『証言』第7巻、182頁。

第五の王国、第六の王国、第七の王国は、その時点でいずれも個々の王国を失っており、したがって、それらの王国は三つの部分から成る一つの王国として共に復活し、神の三位一体のまがい物となる。

子羊のような二本の角で始まり、最終的に竜のように語る一本の角となる第六の王国は、獣の像となるがゆえに、教皇権の預言的特徴を備えている。七つのうちの一つであったものとして復活した第八の王国として主として表されているのは、獣、すなわち教皇権である。しかし、「第八が七つのうちの一つである」というこの預言の謎を最も直接的に成就するのが教皇権であるにせよ、アメリカ合衆国は教皇制の像を形づくり、したがって預言的に教皇権と同じ特徴を現す。

イザヤ書23章によれば、ツロ、すなわち教皇権が第六の王国の終わりまで忘れ去られることになっていたその1798年に、アメリカ合衆国は始まった。1798年は、アドベンティズムの始まりにおけるミラー派にとって終わりの時であった。1844年の春までに、ミラー派アドベンティズムは、アメリカ合衆国の政府を表す共和主義の角と並行して進むプロテスタント主義の衣鉢を受け継いだ。二本の角は同じ動物に生えているので、歴史をともに進んでいく。アドベンティズムの始まりと終わりは、共和主義の角と並行している。1798年から、プロテスタントが第一の天使のメッセージを拒んだ時までの歴史は、神がそのプロテスタントの角を確立した期間であった。神は共和主義の角の場合と同様に、試練の過程を通してそのことを行われた。この並行する二本の角について語るべきことは多いが、今はそうしない。

共和党の角は、真のプロテスタントの角ではなく、背教的プロテスタントと姦淫する。なぜなら、真の角は小羊の花嫁であり、彼女は処女だからである。1989年の終わりの時以降、七人の大統領がいた。その第六の大統領は、アドベンティズム終末期の運動もまた致命的な傷を受けたまさにその年に、致命的な傷を受けた。1989年の終わりの時以降の第八の大統領は、致命的な傷を受け、それが癒された者となる。彼は七人のうちの一人でなければならない。同時に、第六の大統領が致命的な傷を受けた2020年に、いまプロテスタントの任を担っている角もまた殺された。カトリックの獣と同様に、背教的プロテスタントの獣の像と同様に、真正のプロテスタントの角においても同じである。プロテスタントの角は、第六の教会として表され、それが第八となるが、七つのうちの一つである。

これらの主張を検証するとき、恵みの時の終わりの直前に封印が解かれるそのメッセージは、初めが終わりを示すという文脈で必ず提示されることを覚えておいてください。そのメッセージは「歴史主義」という方法論で提示されます。歴史主義は、聖書の歴史を世界史に照らし合わせて世の終わりを見極めるものです。そのメッセージは地から起こります。

まことは地から芽生え、義は天から見下ろす。まことに、主は良いものをお与えになり、私たちの地は収穫をもたらす。義は主の前を進み、私たちをその歩みの道に置く。
詩編 85:11-13

その箇所での「地」が単に「土地」とされているというだけではない。詩篇のその箇所は、「土地」を黙示録十三章の「地の獣」だと特定しているだけでなく、「真理」が地から湧き出ることにも言及している。

新世界のどの国が1798年に台頭し、強さと偉大さの兆しを示し、世界の注目を集めていたのか。象徴の適用については疑問の余地がない。この預言の条件に合致するのはただ一つの国だけであり、それは紛れもなくアメリカ合衆国を指し示している。繰り返し、この国の勃興と発展を描写するにあたって、演説家や歴史家は、聖なる著者の思想、ほとんどそのままの言葉を無意識のうちに用いてきた。その獣は「地から上ってくる」のが見られた。そして、訳者たちによれば、ここで「上ってくる」と訳されている語は、文字どおり「植物のように成長し、芽生え出る」ことを意味している。『大いなる論争』440。

アメリカ合衆国は、「生じる」地の獣である。したがって、これらの記事の主張を吟味するとき、靈感は、そのメッセージが始めによって終わりが例証されるという原則に基づき、歴史の線が幾重にも重ねられた文脈の中に置かれ、そしてアメリカ合衆国の声から出てこなければならないことを示している。もちろんアメリカ合衆国内にも偽りの声はあるが、神の御言葉に従いその權威に基づけば、アメリカ合衆国外に所在する、またはその起源を持ついかなる使者やミニストリーも偽りの光である。アドベンチズムは、アメリカ合衆国で、一人の人物の声と、アメリカ合衆国で確立された運動によって始まった。イエスは、物事の終わりを、その始まりによって例示している。

耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞け。